九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ユーモアの心理学的理論と研究課題

高下，保幸

https://doi.org/10.15017/2328662

出版情報：哲學年報. 35, pp.21-41, 1976-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ユーモアの心理学的理論と研究課題

高　下　保　幸

われわれは毎日の生活の中で、笑いやおかしさに接する多くの機会をもつ。「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん。遊ぶ子どもの声きけば、我が身さえこそゆるがるれ」（梁塵秘抄）と謡われるように、子どもの歓声の中にほのぼのとしたおかしさを感じ、仲間との語らいの時、洒落れた言い廻しに話がはずみ、一日の仕事を終えてくつろいだ気分で新聞に目を通すとき、たった4コマの絵にくすぐったい気持にされる、等である。

このように絶えず人間につきまとう笑い、あるいはユーモアとは、われわれの生活の中でいかなる役割りを果たしているであろうか。第一に、それは習慣、礼儀、規則といった社会生活を送る上でどうしても逃れられぬ束縛に伴う緊張を、柔らげる効果をもつ。それはまたわれわれの行動を、社会的規準から離れないようにし向けるはたらきもする。すなわち社会的に逸脱した行為に対しては、笑い、あるいは嘲笑という制裁が加えられるのである。笑い、あるいはユーモアは、更にはわれわれが様々の苦痛に陥いることから防衛する作用ももつ。

人間の社会的、ならびに個人的生活において、こうした存在意義をもつユーモアの実体は、あいまいで多様であることから、一義的に捉えることは甚だしく困難である。一般にユーモアという言葉は、おもしろいもの、おかしいもの、ナンセンス、滑稽なもの、笑うべきもの、馬鹿げたもの、諷刺すべきもの、果ては詩的なアイロニイに至るまでのものが産み出され、

伝達され、受けとられる場合のできごとを示すものとして、またそこに関わる人間の気質、性向といった特性（いわゆるユーモアのセンス）を示すものというように非常に広汎な使われ方がされている。またそれらが表現され、伝達される媒体も、小説、戯曲、川柳、狂句、映画、演芸、漫画、更には日常会話、日常の様々のできごとなど多様である。

このユーモアの特性、並びにその笑いの表出は、殊更に人間的印象を与えるため、古来哲学者の関心の対象となってきた。その考案のほとんどが、日常の観察からユーモアや笑いが何に起因するのか、更にその本質、それが果たす機能に関する、肘掛け椅子に座っての思索に基づくものであった。

しかし心理学においては、ユーモアを科学的に研究の対象とすることが憚かられ、また研究対象として取り上げてもおずおずとアプローチするばかりであった（ただ精神分析学派は、ユーモアの研究に対する大胆な勇気と先優権とをユーモアの研究の歴史に残しているが）。その理由としては、先ずユーモアが表面的に軽薄で威厳がないことから、研究が持つ生まじめな態度とそぐわないことが挙げられる。また心理学において、「科学的に」と言うことと同義の行動主義的立場から、ユーモアを操作的な変数として捉えようとすると、ユーモアの本質である生々しさ、生命感が凍結されてしまうという方法論の上で問題があることが第2の理由である。更に言うならば、ユーモアは精神分析の立場から主張されるように、深層の意識と関わりを持つ、それ故にユーモアと取り組むことに対して無意識的な怖れによる抑制がかかるのではと思われる。

しかし、近年心理学においてヒューマニスチックなものへの関心の復興がなされていることを背景に（Royce, 1973）、ユーモアについて数多くの実験的研究、経験的研究が提出される傾向にある。最近までのユーモアの、あるいはユーモアに関連した心理学的研究の総括とも言うべき Goldstein & McGhee（1972）の巻末に掲げてある、1900年から1971年8月ま

でのユーモアの文献目録を数え上げると、378の多きにのぼる。それ以後も年間10を下らぬ数のユーモアに関する論文が公刊されている。

それらの研究のほとんどが、いくつかの理論的方向づけの下に、すなわち理論の適切さを検証するために行なわれたものと言える。その理論とは、ひとつに古来より哲学において考察されてきたユーモアの古典的理論であり、もうひとつは心理学の主要な学派の考え方を反映する理論である。

ここでは、それらの理論を概観し、次にユーモアの研究におけるいくつかの課題についての考察を行うものである。

1. ユーモアに関する古典的理論

古くは古代ギリシアから、日常の観察や文学にみられる記述に基づいて、おかしさ、ユーモアに関する多くの理論が提出されてきている。

それらの理論は互いに重複する側面があるが、大きく3つの説明原理、すなわち『優越性の理論』、『葛藤理論』、『解放理論』の3つに分類される。

(1) 優越性の理論

われわれは、他人の誤まちや失敗、例えば道路上で人がつまずいたり、言い損なったりするのを見聞きするとき、笑いが込み上げてくるのを感じる。子どもはただ受動的に他人の過失を待つのではなく、他人に積極的に悪戯をしかけてその人を劣等に位置づけることによって笑うのである。逆に他人を憎悪しその面目を失わせたいと思えば、その対象に対して笑いをぶっつける、すなわち嘲笑するのである（Cohen, 1958）。

ユーモアや笑いは、われわれ自身の優越性、あるいは他者の劣等性を感じることに基づくという、いわゆるユーモアの優越性の理論は、その根源

を古代ギリシアの哲人の思想に遡って求めることができる。Plato は『ピレーボス』において、「笑いは、自分が弱く無害な存在にも関わらず、それを誤認する者に対して向けられる」と、Aristotle は『詩学』の中で、「滑稽とは苦痛を伴わぬ、あるいは害を与えぬ一種のあやまちや醜いものである」と述べている。この理論の近代的意味における。出発点となったのは、Hobbes が『リバイアサン』の中で、「笑いは、他者の弱さと比較すること、あるいは自分自身の以前の弱さと比較することによって、自分自身の持つ或る優越性について、急激に思いつくことから生じる栄光に基づく」と述べたことにある。

この優越性の理論の変形と言うべきものは、Bergson (1908) の笑いや滑稽に関する考察である。彼の考えでは、おかしさの状況とは生体に機械的な何かがみられる場合である。すなわちわれわれは、人間が単に劣った存在としての器械であることを想起させる状況を笑い、おかしいと知覚するのである。

またユーモアの優越性の理論は、笑いが勝利、もしくは攻撃の表出にその起源を持つという考えと適合するように思われる。Eibl - Eibesfeldt (1970) は、サルが敵を威嚇する際に歯をみせリズミカルな声を発することが、人間の笑いの中にみられること（サルのリズミカルな威嚇の声は、人間の笑いの呼気の断続音に対応する）から、笑いが威嚇や憎む、攻撃する行動に起源を持つことを指摘している。しかしながら、われわれが他人に笑いを向ける場合、攻撃的に嘲笑するのは特殊のことであり、一般的には温和で友好的な態度を表明する傾向にあると思われる。その点から、ユーモアの優越性の理論はユーモア、あるいは笑いの限られた現象にのみ適合すると言わねばならない。

ともかくも、このユーモアの優越性の理論は、攻撃性とユーモア、あるいは笑いの結びつきを強調する精神分析学派のユーモアの考察へと引き継がれる。

(2) ユーモアの葛藤理論

ユーモアを認知する過程、あるいはユーモアによって何らかの感情を惹き起こされる過程で、ある種の葛藤や対比がみられる、あるいは辻褄の合わぬことが生じる。例えば、次の小話がその適切な事例となろう。「カメラを買ったばかりで、嬉しくて何でも撮りまくっている人がいる。知り合いの葬式に出掛けて、記念の写真撮影となるに早速出しゃばり、遺族に向かってカメラを構えていわく――ハイ、ニッコリ笑ってください ―。」

多くのユーモアにみられるこの葛藤の概念は、理論家の間の差異によって、矛盾、不調和、驚き、意外性といった言葉に置き換えられる。Beattie (1776) は、不調和を強調する最初のユーモア理論を提起している。すなわち2つ、あるいはそれ以上の不調和な、不適切な、一貫しない部分、あるいは環境を、或る奇妙な働らきかけを行って1つのまとまった事象とみなすことによって、笑いが生ずるものとする。

Kant (1790) は、笑いを期待はずれによって説明する。すなわち笑いとは、脹れきった期待が突然に無と転ずるときに生じる。それは、期待したものが取るに足らぬものに置換される際の特殊な場合とも言える。

また Schopenhauer (1819) は、2つの概念間の葛藤の具合の違いから、笑い、ウィット、愚かさを区分し規定している。すなわち、笑いとは或る対象とその分類概念との間に急に不調和を知覚することから生じ、ウィットとは2つの非常に重なる対象を意図的に同一概念に入れることによって生じ、愚かさとは2つの対象が同一概念にあてはまると考えていたのが誤りであるとわかったときに生じる。

最後に Spencer (1860) は、笑いを『下降的な不調和』によって説明する。すなわち、笑いは意識が大きな事がらから小さな事がらへ思いがけなく移行させられたとき、いわゆる『下降的な不調和』がみられる場合にのみ生じる。逆方向の場合、予期していた小さな事がらが、予期しない大き

な事がらになったとき、いわゆる『上昇的な不調和』がみられる場合は、驚きが生じる。

これらの葛藤の理論は、その葛藤の背景にユーモア状況の二元的構造を仮定することにおいて、ユーモアに関する心理学的理論の1つであるゲシタルト理論の見解と、またその矛盾した構造が、ユーモアの受け手に心的な緊張を惹き起こすことにおいて、ユーモアの覚醒理論へと気脈を通じることとなる。

(3) ユーモアの解放理論

ユーモアの解放理論は、ユーモアあるいは笑いをストレスからの解放と緊張の解消によって生じるものと説明する。例えば、放課後の校庭に飛び出してくる子どもたちの笑いやどよめきがその良い事例であろう。

このユーモアの解放理論は、Descartes (1649) まで遡ることができる。彼の考えによれば、笑いはある悪事に対して憤りを覚えたにも関わらず、その悪事が自分を傷つけるものではないとわかった場合に生じるものである。

その後も、笑いを苦痛や驚きの除去によって (Hartley, 1749)、あるいは抑圧の解放によって (Sully, 1903) 生ずるという考察が出されているが、より包括的で徹底した解放の理論は Gregory (1924) である。彼の考えでは、解放が多くのいろんな笑う状況――苦労の末の成功による笑い、敵の無能を認めることによる笑い、初めての会合で知人をみつけることによる笑い、等――に共通した因子であるとする。

以上に挙げたような心的緊張によってユーモアを説明しようとする考えは、以後心理学固有のユーモア観、すなわち精神分析理論と覚醒理論の中に受け継がれることになる。

これまで述べてきたユーモアの古典的理論の各々は、あるユーモア事例

には適合するが、他の事例にはあてはまらない。そのことが理論の不適切さを示すのか、あるいは一面的に捉えられないほどにユーモアが多様であることを示すのか、今はまだ明確に言えない。ただ言えるのは、あらゆるユーモア現象をカバーする統一理論はこれまでみられなかったこと、それにも関らず提出された各理論はある幅の蓋然性をもってユーモアを説明し得たこと、更にはそれら理論の基本的な考え方が心理学独自のユーモア理論に影響を及ぼしていることである。

それでは次に、その心理学的立場からのユーモア理論をみることにする。

2. ユーモアの心理学的理論

心理学独自の立場からユーモアを解釈しようとする理論は、ユーモアの無意識的動機づけの側面に偏よる精神分析学派の理論と、ユーモア刺激の知覚、あるいは認知構造の側面を重視するゲシタルト理論の2つに大きく分けられる。この2つの理論は、偏った視点をもつことによってあらゆるユーモアの側面を考慮に入れた包括的な統一理論とはなり得なかった。

最近、こうした不備を補う目的もあって、ユーモアの覚醒理論の名の下に前述の2理論の考え方を含めて論議しようとする傾向がみられる。次にその3つの理論について順次述べる。

(1) ユーモアに関する精神分析学派の理論

ユーモアや笑いが精神エネルギーの節約によって生ずるという、Freudによるユーモアに関する精神分析学の立場からの説明（Freud, 1905）は、いわばユーモアの古典的な解放理論を現代的に翻案したものと言うべきであろう。

Freudは、ユーモアの根本的原理として『節約』の原理を提起する。す

なわち、笑いを惹き起こす条件として『精神作業の節約』を挙げる。われわれは理解できないと思われる、あるいは脅威的であると思われるものに対して、当初のうちはある量の心的努力、精神作業を費やそうとする。しかしその問題状況が無害で取るに足らぬものとわかった場合、それまでわれわれを駆りたてた心的努力、精神作業が心要でなくなる。笑いとは、その既に過剰となった心的エネルギーの放出にほかならない。

Freud は更に、その心的エネルギーの節約を惹き起こす状況を、認知的要素、欲求的要素、感情的要素のいずれかが優位を占めるかによって、それぞれ滑稽 comic、ウイット、ユーモアの3つに区分している。

Freud の言う滑稽とは、認知的色彩の濃いおかしさである。その事例においては、何かの概念によって説明できる2つの状況がみられる。その2つの状況の一方が他方に比べてまじめではない、むつかしく考える必要がなくなる（『思考の節約』）結果として、笑いが生じる。換言すると、滑稽な状況には、何かを重要であるとする構えから、それを取るに足らぬ重要でないものと知覚することへの移行が含まれ、その結果生じるエネルギーの節約が笑いとして発散されるのである。

その2つの状況とは、まじめなものとふまじめなもの、大人としてふさわしい理性的なものと子どもじみたもの、自分自身の知覚と他者の知覚、といったある種のコントラストを含むものとなる。この見解において、ユーモアのゲシタルト理論の、ユーモアは二元構造をなしておりその認知には二焦点知覚を必要とするという考えと、遡っては古典的なユーモアの葛藤理論と軌を一にするものであり、また劣ったものと優れたものとのコントラストがみられると主張する点においては、古典的なユーモアの優越性の理論を連想させるものである。

Freud の言うところのウイットとは、もっぱら言葉やアイデアの遊びのことであり、その際の『抑圧の節約』によって快感や笑いを生み出すものである。Freud は、ウイットを更に細かく『底意のある tendential ウイッ

ト』と『無害の harmless ウイット』に分けている。

底意のあるウイット形式においては、通常は抑圧されている性的衝動（欲求）、あるいは攻撃的衝動（欲求）が、社会的に許容されている冗談として一時的に解放され、抑圧されていた本能的エネルギーが笑いとなって発散される。無害のウイット形式においては、通常われわれが偏りがちである道徳的、理性的、論理的に認知しようとする努力が無為に帰して発散され、無意味な考えや行為への退行傾向がみられる。

Freud は、ウイットに関する最初の著作から23年後、ユーモア（特殊な狭い意味でのユーモア）の理論を展開している（Freud, 1928）。Freud の言うところのユーモアにおいては、『感情の節約』がみられる。すなわち通常ならば何らかの強い否定的感情――例えば脅威や不安――を惹き起こす状況の重大さを軽視する、軽減することによって感情の節約がなされる。Freud はその事例として、いわゆる『絞首台ユーモア』を挙げている（月曜日の朝、絞首台にひかれてゆく囚人が、ふとつぶやく。「ふん、今週も幸先きよく上天気で始まったな」と。）。

そこには、事態の重大さは無視され、現実の明らかな否定がみられる。かくして、ユーモアは、自分を苦しめそうな現実をわが身に近づけないようにする機会を持つと言える。Freud は、この機能からすれば、ユーモアとはわれわれ人間の精神が強圧的な苦しみから逃れようとして考案した諸方法――神経症、精神錯乱、陶酔、恍惚など――の系列に属するものであると指摘している。ただユーモアには、特有の解放的、高揚的効果があること、またある種の健康さと尊厳さをもつことにおいて、それら諸方法から区別されると付け加えている。

Freud 以降も多くの研究者が、ユーモアに関して Freud が提起した精神分析学的な立場を基礎として更に深化発展させた見解を出し、その実験的な研究も行なわれている。ここでは、そうした研究の代表として Levine

(1956) を取り上げることにする。

Levine (1956) は、あらゆるユーモアを構成する基本的要素として不安をとりあげる。もしある状況が不安をかきたてたとしても、その不安が直ちに払拭される場合その状況はおかしいとされる。しかし不安が喚起されるばかりで消去されないならば、みかけの上ではユーモラスな状況に対して、嫌悪感、羞恥心、とまどい、果ては恐怖によってすら反応がなされる。もうひとつに、あるユーモア状況が示すテーマに対して何らの葛藤もみられない、あるいは葛藤があっても強く抑圧されて不安が喚起されない場合が考えられる。このときには、ユーモア状況に対してなんら関心が示されないことになる。

Levine が最も明示したいことは、ユーモアを処する方法（ユーモアのセンスと言ってよかろう）にみられる個人差であった。その個人差は、パーソナリティの深層の諸側面と情緒的な発達とが反映されると考えた。この仮説を検証するために、多数の正常者と精神病院の患者にカートーン（ひとコマ漫画）を呈示した。その結果、情緒的に不適応の人は2つの典型的な反応を示した。すなわち、ジョークやカートーンを構成する重要な要素にまったく気づかぬこと、並びにそのユーモア状況が意図しない動機、ありもしない動機がそこにあると誤って理解するのである。

Levine は以上のことから、ユーモアを解する能力がないこと、あるいはユーモアに対する反応にずれがあることは、その人が不適応であること、心理的に混乱していることを示す敏感な指標となることを示唆している。

(2) ユーモアに関するゲシタルト理論

ユーモアの精神分析的な理論が、特にユーモアの情緒的特性を強調したのに反して、ゲシタルト心理学の立場からの見解とは、ユーモアの認知的過程を説明するものである。

ユーモアに関してゲシタルト理論を最初に導入したのはMaier（1932）である。その説明には、先ずユーモアの刺激素材の構造が重視され、伝統的なゲシタルト学派の考えである全体論が導入される。すなわちユーモアは、その要素が構成しているユーモアの全体的統合体に依存しており、ユーモアのある側面を変化させることは、全体と構成要素とがそれまで持っていた意味を変化させると考える。

またユーモア刺激の意図が唐突に理解されることを、ゲシタルト心理学の主たるテーマである知覚パターンが再体制化されるときの、あるいは問題状況において生産的な洞察によってその問題が解決されるときの突然性、意外性に対応づけている。

更にユーモア状況において客観性が重要なものとなることを指摘している。すなわちユーモアに登場する人物を誰それだときめつけないことによって、あるいはユーモア素材に自分がもっている激しい情緒でもって共感することのないときに、ユーモラスな効果が維持されるとする。これは問題解決の場面において、生産的思考を行うのにその問題に固執せずに客観的な態度を必要とすることと対応する。

以上のようにユーモアの認識と生産的思考とは、全体構造の突然の変化と客観性とを共通の特徴としてもつのである。したがって、ユーモアを生産的思考から区別する他の要素を、おかしさの本質として求めなければならない。Maierは、その要素をユーモア状況の独立性であると言う。すなわちユーモア状況の背後にある論理は、その状況しか適合しない独自のものであることから、そのユーモア状況はまじめなものとはみなされないとするのであるが、このユーモアを生産的思考から区別する見解は未だ検討の余地があるように思われる。

心理学者ではないが、Koestler（1964）はゲシタルト理論と同じくユーモアの構造に注目して、それを『二元結合 bisociation』というもっと明確な言葉によって記述している。すなわちユーモア現象の基礎には、科学

上の発明発見、芸術活動など他の創造的な知的活動と同じく、二元結合という心的過程があると指摘する。

二元結合とは、「ある状況やアイデアを自己矛盾しないが、習慣的には両立しない2つの準拠枠によって知覚すること」である。その二元結合、あるいは二重知覚を行うことによって、ある文脈から異なる論理や規則に支配された別の文脈へと思考連鎖の素早く思いがけない移行が生ずる。ユーモアの状況の場合、自己主張の感情や攻撃的、防衛的な情緒が含まれると、それらの感情や情緒は大きな惰性と固執性を持っているために思考の素早い飛躍について行けずに、最も抵抗の少ない笑いの表出となって発散されるというのが Koestler の説明である。

ユーモアの二元性についての主張は、多少とも観点が異なるけれども、ユーモアが解釈されていわゆるオチが生じると、『顕在―隠在』の反転がみられて現実の状況を内的に再定義するように強制する（Fry, 1963）、ジョークの構造には図―地の反転が、注視する要素の転換が生じる（Bateson, 1969）、といった見解にみられる。

最近では、こうしたユーモアに関する認知的な理論に基づいて、ユーモアの発達に関する考察も提出されている。例えば Bever（1968）は、5歳児は「どうして砂漠では飢え死にしないと言えるの？」「サンド・ウイッチがあるもの」といった文法上の表層構造のあいまいさが含まれるジョークをよく笑うが、10歳児になると「エンパイア・ステートビルよりもどうして高く跳び上がれるの？」「だって、それはまったく跳び上がれないもの」といった深層構造のあいまいさが含まれるジョークを笑うようになることを明らかにしている。また McGhee（1971）によれば、大体7歳ごろ論理的思考水準にまで発達すると、刺激要素の間の論理的関係が破壊されることや不調和の中にユーモアを認めるようになるという。

今後はこうした子どものユーモアを説明する試みによっても、ユーモアの認知的理論の洗練化が行なわれることと思われる。

(3) ユーモアに関する覚醒理論

ユーモアに関する覚醒理論とは、ユーモアの情緒的側面に焦点をあてる精神分析的理論とゲシタルト心理学の立場からのユーモアの認知構造を重視する見解を結びつける試みである。この理論のポイントは、ユーモアを覚醒 arousal の水準（刺激作用、あるいは緊張）の上昇、下降によって説明することにある。いわばユーモアの古典的な解放理論の伝統をうける主張と言ってよい。次にその典型的な理論である Berlyne (1969) と Tomkins (1962) の論点を、更に覚醒理論を幼児の笑いに適応する Kagan (1967) の概要を述べる。

Berlyne (1969) のユーモア理論は、探索行動や好奇心についての見解をユーモア現象の説明に持ち込んだものである。先ずユーモアの状況においては、明らかに異なる2つの心理的な局面がみられることを示唆する。2局面とは、われわれがユーモアの状況に直面した当初のとまどいや困惑の期間と、それが突然に明快な気分や安らぎにとって替わられる期間である。この事実からユーモアの状況とは覚醒を上昇させる因子と、覚醒を下降させる、あるいは適度に維持する因子を含むと主張する。そして高い覚醒水準は不快であるため、覚醒の上昇に引き続いて下降が生じると快となり、また覚醒の適度の上昇も、それに引き続いて覚醒が下降するかどうかに関らず快となると考える。

ユーモア状況において覚醒を上昇させる因子としては、性、攻撃、優越性などの情緒傾向の表現が、あるいは新奇さ、驚き、不調和、複雑さ、などのすべて葛藤によって覚醒に影響を及ぼすと思われる対照変数 collative variables が挙げられる。

覚醒の下降は、その覚醒を惹き起こす原因となった情緒傾向が充足されることによって達せられる。例えば何らかの攻撃的な言動が示されて、当初の間覚醒されたとする。しかしその状況の遊び的な雰囲気によって、あ

るいはその言動が友好的な表情を伴ってなされることによってその脅威が無害と認められると、覚醒は下降して快適な気分が経験される。この対照変数に起因する覚醒は、更に新しい情報（例えばジョークのオチ）が呈示されることによって、あるいはユーモアの受け手自身の思考過程において再体制化がなされることによってユーモア状況のポイントが把握、理解されるときに下降する。

Tomkins (1962) は、人間に生得的に備っている賦活器によって肯定的感情や否定的感情が賦活されるという理論を展開する中で、笑いについて Berlyne と同様の見解を出している。先ず神経の発火、すなわち刺激作用の密度によって感情を区別する。興味、恐怖、驚きといった感情は、刺激作用の急激な増加によって生じる。それに反して、喜び、微笑、笑いという肯定的な感情は、刺激作用の低下によって賦活される。笑いは微笑の大きな形式であるが、微笑よりも高い水準からの刺激作用の低下によって生じる。そして微笑、笑いのいずれも、生起するには、刺激作用の減少がある勾配以上でなければならない。笑いを惹き起こす条件に関する Tomkins の分析が、Berlyne の考えと異なるのはこの最後の2点、すなわち刺激作用の低下が始まる基線を設定したこと、それにその低下の勾配がある限度以上でなければならぬと指摘していることにある。

Kagan (1967) は、人間の顔に対する微笑反応の発達を論ずる中で、緊張という伝統的な言葉によってユーモアの覚醒理論的な見解を述べている。先ず生後4ケ月の乳児も、8歳児も共通の特徴を持つ事象に微笑する事実を指摘することから始める。その事象の特徴とは、子どもが持つ『図式』との不一致がみられることである。子どもはその事象を積極的に同化しようと努力して緊張するが、ある認知的発見に基づく同化がなされ、緊張が低下して微笑するという。すなわち Kagan は、子どもの微笑の基礎に緊張の低減を置くのである。

最近漸やくに、これらの理論を実証的に検証する研究がみられるように

なった。特に対照変数、すなわち『新奇さ』『不調和』『複雑さ』『驚き』などの要因との関連において研究がなされている。

これまでユーモアを説明する哲学的理論、次いでそれらの古典的な理論を受けて心理学独自の立場からユーモア考察した理論の概要をみてきた。

ある現象を理解し説明しようとするとき、全体的理論と限定された領域理論のいずれに準拠するのが利点となるか問題とされる。ユーモアに対する典型的な心理学的アプローチは、上にみたように数少ない基本的原理、すなわち精神分析理論、ゲシタルト理論、覚醒理論などによってユーモアを説明しようとするものであった。精神分析理論は情緒的な側面を、ゲシタルト理論は認知的な側面を、覚醒理論は情意的な側面を、強調するものであったが、ユーモアの経験的な事象と適合することや、新たな研究方向を引き出すことにおいて、うまく行ったとは言えないようである。その理由は、恐らくそれらの理論が、ユーモアのある側面を強調しながらもなお全体的な理論の色彩が濃いからであろう。ユーモアの多様さからすれば、それらを全体理論の中に包括してしまうアプローチには、ユーモアの重要な次元やメカニズムを見落とす可能性が伴なうと思われる。それ故により適切なアプローチとは、その対象とするユーモアの属性をこれまでの理論よりもずっと限定した領域理論を構成して、それを経験的な事例に基づいて検証してゆくことである。その当初は顕著なユーモア次元に注目する領域理論を提起することから始めて、それら領域理論の多くについて経験的な事象との関係づけに基づいて妥当性を確かめることによって、ユーモア現象を真にとらえる全体的な理論化への道が開かれるであろう。例えば最近 McGhee（1972）が、ユーモアの唯一つに限定した基礎、すなわち不調和や矛盾についての発達の領域理論を提出しているのがそのアプローチの適例であろう。この数十年間、理論的枠組み、ならびに方法においてあ

まり変化がみられなかったユーモアの心理学的研究は、最初から包括的な理論化を求めることはせずに領域理論を導入することによって、ユーモアに関してこれまでにみられない発想と、着実な研究の発展が期待されるであろう。

最後に、ユーモアに関する有望な研究課題のいくつかを挙げて、ユーモア研究の将来の展望としよう。

3. ユーモアの研究課題

ユーモアに関する領域理論として構成すべきテーマは数多く考えられるが、その中で特に当面の研究目標とすべき3つの課題をとりあげる。

(1) ユーモアと笑いの関係

ユーモラスなできごとをわれわれの目に特に印象づけ、その反面謎めいたものにするのは、ユーモアの笑いとの結びつきである。ユーモアを笑いや微笑によって規定する場合の問題点は、ユーモア以外の状況によっても笑いや微笑が惹き起こされるということである。勝利や軽蔑の笑いなどがそうであるが、くすぐりによる笑い反応は特にその事例として挙げられる。またユーモアは笑いが伴わずに楽しまれる場合がある。とにかくに笑いは、ユーモアの近く遠くにとつきまとうものである。

こうした事実がありながら、ユーモア研究においてはユーモアと笑いとの関係を明確にした見解は、なんら出されていない。この関係を記述する手がかりのひとつは、笑いの起源、発達を、それに伴なう精神活動の諸側面の発達と対応づけることである。Eibl-Eibesfeldt（1970）によれば、先天的盲児が嬉しいときに微笑し笑うことから、微笑や笑い反応は先得的な動作様式とされる。高橋（1975）によると、生後1年間の微笑反応は、出生直後の外的刺激なしの自発的微笑、いろんな触、聴、視刺激に誘発され

る外的微笑、特定の見慣れた人にのみ向けられる社会的微笑という発達変化をみせる。微笑という表現形態は同じく維持されても、その意味合いにおいて、種として組み込まれた生物的反応から、『何か』に微笑するという学習された社会的反応へと変容するのである。このように乳児期におけるユーモアの刺激や経験を伴わぬ笑いについての意味づけはなされている。しかしこの時期以降のいわゆるユーモア反応と笑いの結びつきについては何らの説明も出されておらず、新たな領域理論の提唱が待たれている。

(2) ユーモアのモチヴェイションの側面

ユーモアに関する理論は、大きく肯定的観点のものと否定的観点のものとからなる。

ユーモアに関する負の観点とは、ユーモア現象の生理的要素、緊張減少的機能、優越感と結びつく破壊的、性的、原始的性質を強調している。また笑いについても、それを個体発生的退化である、あるいは、狩猟動物が獲物を手に入れる時に見せる歯をむきだしの怒りの姿勢への系統発生的な先祖返りであるとする主張さえみられる。こうしたユーモアに関する負の観点は、主にユーモア刺激の内容に向けられているように思われる。

ユーモアに関する肯定的な観点とは、ユーモアを解放的な創造活動とみなす。ユーモアのセンスは「一般的な適応性」の指標とみなされ、また建設的な力を持つものとされる。ここでは、個人が適応する努力において果たすユーモアの機能的役割が強調されている。この観点における焦点は、ユーモア刺激のテーマ内容と笑い反応という情緒的側面におかれている。

以上のことから、ユーモア現象をその認知機能を通じての適応という、これまで見過ごされてきた正の観点を考慮すべきと思われる。

ユーモア過程において認知機能が賦活化されることには、ある満足が伴なう。われわれはジョークのポイントをみつけることを楽しみ、そのポイン

トが微妙で間接的であればある程、それを見出す喜びは大きくなる。またあるジョークを理解するには、圧縮化、不調和の発見、通常でない言語表現を理解する、二重の意味を見つける、といったいろんな認知能力を必要とする。

こうしたユーモアの基礎にある認知活動に伴なう本質的喜びは、パズル、ブレーン・ストーミングによる問題解決、ミステリーの解読、などの活動にもみられる。

以上のことからユーモア現象を、認知能力を発揮することの喜び、外界との相互作用をうまくやることに喜びを感じる、すなわち内発性のモチヴェイション（White, 1959）によっても規定されることを認識し、この領域でのユーモア理論の発展が期待される。

(3) ユーモアの創造的側面

Koestler（1964）は、ユーモア現象と創造活動とが、同じくその基礎に二元結合という心的過程がみられることを指摘している。

すなわちユーモリストの認識行為は、通常は相容れない2つの文脈間の瞬間的な結合を行うことである。創造的発見行為も同様に、かっては互いに相容れないと考えられていた思考や知識の体系を永久的に結合するものと説明される。科学史をふり返ると、偉大な発明、発見がなされたとき、「そんな馬鹿げたことを」という笑い声が向けられたことが、ユーモアと創造行為との心理的基礎の類似性を象徴的に示している。

こうしたユーモア現象の創造的側面をふまえた上で、これまでほとんど見過ごされてきたユーモアを作ることに研究の目を向けることによって、ユーモア現象のいっそうの理解がなされることと思われる。

参 考 文 献

(1) Bateson, G. The position of humor in human communication. In Levine, J. (Ed.) Motivation in humor. N. Y.: Atherton, 1969.

(2) Beattie, J. On laughter and the sense of humor. In Essays. Edinburgh: Creech, 1776.

(3) Bergson, H. Le rire, essai sur la significance du comique. Paris: Alcan, 1908. 林達夫訳『笑』岩波書店，昭13.

(4) Berlyne, D. E. Conflict, arousal, and curiosity. New York: Mc Graw-Hill, 1960.

(5) Berlyne, D. E. Laughter, humor and play. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.) Handbook of social psychology (2nd ed.) Vol. 3. Reading, Massachusetts: Addison- Wesley, 1969.

(6) Bever, T. Associations to stimulus-response theories of language. In T. R. Dixton & D. L. Horton (Ed.) Verval behavior and general behavior theory. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1968.

(7) Cohen, J. Humanistic psychology. London: George Allen & Unwin, 1958，北村・大久保訳『人間性の心理』誠信書房，昭43.

(8) Descartes, R. Les passion de l'âme. Paris, 1649.

(9) Eibl-Eibesfeldt, I. Lieβe und Hass: Zur Naturgeschichte elementarer Verhaltensweisen. München: R. Piper & Co. Verlag, 1970. 日高・久保訳『愛と憎しみ』みすず書房，昭49.

(10) Freud, S. Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten. Leibzig and Vienna: Deuticke, 1905. (Wit and its relation to the unconscious. New York: Moffat Ward, 1916.)

(11) Freud, S. Humour. Int. J. Psychoanal., 1928, 9, 1-6, 高橋義孝訳，フロイト選集7巻『芸術論』309-321，日本教文社，昭28.

(12) Fry, W. F. Sweet madness: A study of humor. Palo Alto, Calif.:

Pacific Books, 1963.

(13) Gregory, J. C. The nature of laughter. London: Kegan Paul, 1924.

(14) Hartley, D. Observation on man, his fame, his duty and his expectations. London, 1749.

(15) Kagan, J. On the need for relativism. American Psychologist, 1967, **22**, 131-143.

(16) Kant, I. Kritik der Urteilskraft. Berlin: Lagarde, 1790.

(17) Koestler, A. The act of creation. New York: Macmillan, 1964. 大久保直幹他訳『創造活動の理論』ラティス，昭41.

(18) Levine, J. Response to humor. Scientific American, 1956, **194**, 31-35.

(19) Maier, N.R.F. A Gestalt theory of humor. British J. of Psycholgy, 1932, **23**, 69-74.

(20) McGhee, P. E. Development of humor response: A review of the literature. Psychological Bulletin, 1971, **76**, 328-348.

(21) McGhee, P. E. On the cognitive origin of incongruity humor: Fantasy assimilation versus reality assimilation. In J.H. Goldstein & P. E. McGhee (Ed.), The psychology of humor: Theoretical perspective and empirical issues. New York: Academic Press, 1972.

(22) Royce, J.R. The present situation in theoretical psychology. In Wolman, B. B. (ed.) Handbook of general psychology. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1973, 8-21.

(23) Schopenhauer, A. Die Welt als Wille und Vorstellung. Leipzig: Brockhaus, 1819.

(24) Spencer, H. Physiology of laughter. Macmillan's Magazine, 1860, **1**, 395. Reprinted in Essays, scientific, political and speculative.

Vol. 1, 2. New York: Appleton, 1891.

(25) Sully, J. Essay on laughter. London: Longmans, Green, 1903.

(26) 高橋道子：微笑反応の発生と展開：日本心理学会第39回大会発表論文集，1975，27.

(27) White, R. Motivation reconsidered: The concept of competence. Psychol. Review, 1959, **66**, 297-333.